

ワクワクさせる視点、新天地でのスタート、地域の研究への貢献、そういうものを応援したい

東レ科学技術研究助成
選考委員会委員長・副委員長

榎 裕之 トヨタ学園常務理事

清水孝雄 国立国際医療研究センター脂質シグナリングプロジェクト長

東レ科学技術研究助成

東レ科学技術研究助成は、若手研究者の萌芽的研究を助成し、日経サイエンス10月号にインタビューを掲載した山中伸弥・京都大学教授のiPS細胞樹立研究をはじめ、数多くの優れた研究成果を生み出してきた。これまで60年間の総助成件数と金額は、658件68億8500万円にのぼる。その選考はどのように行われるのか。隔年で交互に選考委員長を務める榎裕之、清水孝雄の両氏に、選考にあたっての思いを語っていただいた。

東レ科学技術研究助成のいちばんの特徴は何でしょうか？

清水 萌芽的な研究に1千万円を超える大きな金額を助成することです。生物、化学、物理、天文、工学などの広い分野の若い研究者たちの自らの好奇心に基づく基礎的な研究に対して助成します。

選考には様々な研究背景を持つ9名の選考委員があたります。1次の書類選考は担当の先生が行いますが、2次選考のプレゼンテーションは選考委員全員の合議で決定します。

専門分野の人だけでなく、いろいろな分野の研究者にとって魅力のあるテーマ

や視点でなくてはならない。これも大きな特徴でしょう。

榎 異分野の仕事は解説なしには評価しにくいので、専門分野の委員に「何が面白いのですか？」と詳しく、かつ率直に聞き、答えに納得できるかどうかで判断を進めます。

また、各分野からバランスよく選ぶよりも、「いいものはいい」という意識で選ぶ傾向が強いため選択の自由が大きく、分野を超えた非常に興味深い議論を行って、選んでおり、とても刺激的で、充実した時を味わっています。

清水 その通りです。書類選考でも、単純に点数で選ぶことはしません。Bが並ぶものより、Cもあるが、Aがあるほうが興味深い。何か突き抜けていると誰かが評価しているのであれば、皆でプレゼンテーションを聞いてみよう。

榎 何かワクワクさせる視点や要素があるかどうか大事ですね。私のように応用科学の研究者の視点からすれば、学術的な飛躍性が実用的な発展性のい

ずれかを感じさせるか否か次第です。判断する私たちの想像力や予想する力を試されている面もあり、これが非常に面白い点です。

どんな研究者に応募してほしいと思われますか？

清水 すでに他の組織から大型の研究費を支援されている方に対して、上乘せすることはしていません。海外から戻ったり研究機関を移ったりして、新しい場所で研究をスタートさせる、研究テーマを変えて挑戦する、そういう新たなスタートを切る研究者にはぜひ応募してほしいですね。

榎 研究機関を移った直後は、研究の鍋釜に当たるものさえないことがあります。そういう状況にある研究者の申請を読むと、東レ科学振興会の助成の必要性や有効性がひしひしと伝わってきます。テーマや視点の良し悪しに加えて、こうした支援も重要なポイントになっています。鍋釜は、文部科学省の

科学研究費のようなもので買うわけにはいかないのです。

清水 地方の大学などに移った場合、申請にある基盤的な装置や機械を、応募者だけでなく大学全体、さらにはその地域全体で使えば、研究レベルを高めることができると思うものがあります。このような地域の科学技術コミュニティーに貢献するという点も大事ですね。

プレゼンテーションでは何を注視していらっしゃいますか？

清水 書類で読んだ時とは印象や評価が変わるケースが多いですね。私たちの想定外あるいは分野外からの質問に対してどう答えるか、これがその研究者の地力、つまり普段からどれくらい考えているかを示すことになります。専門用語に頼らず、いろいろな言葉や表現を用いて、さまざまな分野の選考委員に研究の重要性を理解させる

ことができれば、国民にもわかってもらえます。

また、書類には記されていない研究途中の予備データが発表されたりすると、申請が単なる夢物語ではなく、それなりの根拠があるものだということが如実にわかります。

榎 その研究が学術全体に大きな影響をもたらすものだと感じさせる、率直で丁寧なプレゼンテーションであれば、問題のスケールの大きさが伝わり、異分野の仕事であっても「なるほど、これは根本課題だ」と納得でき、興奮しますね。選考委員の醍醐味です。

東レ科学技術研究助成をさらに発展させ、より良いものにするには何が重要でしょうか？

清水 60年前の設立時から1千万円の助成を行っているのは素晴らしいことですが、当時と比べてあらゆるものが高価になっていることもあり、総額がもう少し増えたらいいな、という思いがあります。萌芽的な研究を行いたい研究者にとって、助成金が貰えるか貰えないかは天国と地獄の差があります。僅差で残念なケース

もあるので、もう少し増えればと…。

女性研究者の採択をどう増やすかも重要です。女性枠も議論にはなりますが、研究の質で評価するのが私たちの基本姿勢です。その上で応募数をどうやったら増やせるか？

榎 日本では国以外に1千万円を超える助成金を出す機関はほとんどありません。100万円程度の助成を20件ほど出す財団が多くあり、科学研究費の融通性の不足を補い、潤滑油のように使ってもらうのがその主旨になっています。一方、1千万円は潤滑油ではなく研究費の中核部分となり、萌芽的研究のトリガーになっています。ここが非常に重要です。他の財団にもこの点の大切さが伝わってほしいと思っています。

そのためには、東レ科学技術研究助成が、60年間にわたり確固たるフィロソフィーを持って日本の科学技術を支援してきたことを、明瞭なメッセージとしてより広く発信してほしいと思っています。

● 次回は2021年2月号に、東レ科学技術研究助成を受けて活躍する6人の科学者を紹介します。どうぞ楽しみに。

東レ科学技術研究助成とは

国内の研究機関において理学・工学・農学・薬学・医学(除く臨床医学)の分野で自らのアイデアで萌芽的研究に従事しており、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる若手研究者に、毎年総額1億3千万円(1件3千万円程度まで、10件程度)の研究助成金を贈呈する。76の学協会および推薦人に推薦を依頼し、選考委員会での選考を経て、理事会で決定する。

公益財団法人 東レ科学振興会

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町3丁目3番16号
TEL (03) 6262-1655・1656 FAX (03) 6262-1901



清水孝雄 (しみずたかお)
東京大学名誉教授。
元東京大学医学系研究科教授、
元東京大学医学部長、副学長。
2013年より現職。専門は生化学、分子生物学。



榎 裕之 (さかきひろゆき)
東京大学名誉教授。
元東京大学生産技術研究所教授。
豊田工業大学前学長。
2019年より現職。
専門は電子工学。